



思い出の シネマテーク



地下街の映画館

前置き：

シネマテークとは、[1935年](#)（昭和10年）に[アンリ・ラングロワ](#)と[ジョルジュ・フランジュ](#)が、[フランス](#)の首都[パリ](#)で、旧作フィルムを上映するための[シネクラブ](#)「セルクル・デュ・シネマ」を結成し、翌[1936年](#)（昭和11年）に発展的に組織した「[シネマテーク・フランセーズ](#)」をはじめりとする。

とあるオフィス街の地下に、小さな古ぼけた映画館があった。

私は、学生時代からこの映画館に通っており、旧作やリバイバル作品を観ては、日頃の現実の憂さや悩みから、逃避できる唯一の場所がこの映画館であった。

最初に何を観たかは定かではないが、いくつもの映画をここで観てきた。

街路樹の木々が黄色く色づき始めた10月の始め頃、いつものように仕事を終え、オフィスを出て、地下街に降りる階段の途中の側面に貼られてあるこの映画館のポスターの片隅に、閉館のお知らせが目につき、私は思わず急いでこの映画館の前に来てしまった。

いつもその日の上映作品の最後の回は半額になる。

私は入場券を売ってる窓口のおばさんに一枚とって、自動ドアではなく、重いガラスの扉の取っ手を引き、もぎりの人にその入場券の半分をちぎってもらうのだ。

今日の映画の最後の回はすでに始まっており、私は入口のドアをゆっくりと開け中に入った。薄暗い館内には、2, 3人しかいなかったように思われる。

上映されていた作品は、

「カイロの紫のバラ」という、映画で、舞台は1930年代のニュージャージー州。セシリア（ミア・ファロー）はウェイトレスをして、失業中の夫モンク（ダニー・アイエロ）との生活を支えている。惨めな生活とモンクとの愛のない結婚から逃れるため、セシリアは映画館に通っているのだが、今上映されている「カイロの紫のバラ」という映画に彼女は夢中になっているのだった。

その映画のスクリーンから、なんと映画の主人公が飛び出てくるという奇想天外なストーリーが、
この映画の見どころだった。

しかし、空想の展開は現実に戻り、

またセシリアは映画のスクリーンに目を向けているシーンでこの映画は終わる。

ウディ・アレン監督の何ともアイロニーな作品だった。

私は、この映画を観たのが3回目だったので、ストーリーも主人公の場面も、新鮮味というか驚きの感動もなかったので、映画の途中から、寝てしまい、いつものように、終了のブザーとともに灯る赤い案内灯が目に入り、掃除のおばさんに肩を叩かれ、映画館の席から立ち上がろうとするのだった。

そして、わたしの夢心地の時間も終わった。

映画館を出て、いつも行く場所があった。

地下街から上がったビルとビルの間を通りぬけ、

ぼんやりとしたあかりが灯るあるバーに向かっていくのだった。

カウンターに席に着き、ウィスキーハイボール一杯たのむ。

店の人との会話はほぼないが、今日観た映画はこんなだったと語る時もある。

私は、ウィスキーハイボールを一口飲み、安堵の一瞬から、息をすうと吐き。

自分の30年勤めた仕事も、後5日なのだと、考え深げになるのだった。

カイロの紫のバラ

THE PURPLE ROSE OF CAIRO



憧れのスターがスクリーンから抜けだした。
いま、愛を語って
誰よりも心優しく。

Mia Farrow Jeff Daniels Danny Aiello
 Jack Rollins Charles H. Joffe Michael Hyman Michael Morse
 Charles H. Joffe Robert Greenhut
 Director of Photography: Gordon Willis
 Editor: Charles H. Joffe
 Music by: Wendy Allen
 Produced by: Orion
 © 1985 Orion Pictures Corporation
 All Rights Reserved

ミリア・ファロー、ジェフ・ダニエルズ、ダニー・エイエロ
 ジャック・ローリンズ、チャールズ・H・ジョフ、マイケル・ハイマン、マイケル・モース、ゴードン・ウィリス、チャールズ・H・ジョフ、ロバート・グリーンハット
 音楽：ウェンディ・アレン
 © 1985 Orion Pictures Corporation 全著作権所有

ラジオデイズ

次の日も、仕事帰り、地下の映画館に寄った。

今日はこの映画館のラストまでの日替わりで、今日は「ラジオデイズ」という映画だった。

第二次大戦直後のニューヨークを舞台に、華やかだったラジオの日々とある一家の平凡だが幸福に充ちた生活を描く。ラジオが家庭の中心だった頃の映画だ。

この日も疲労感からか、上映の途中で寝込んでしまった。

夢の中で自分の子供時代が次々と湧き起ってきた。

夏休み、同級生と家の近くの川で遊んだことだ。

その時、履いていた草履が片方脱げ、川に流され、延々と下流に向かって、友達とその草履を追いかけ、その友達に拾ってもらうことが出来、日が暮れて、かじかが泣き出す頃まで遊び呆けていた。そして、帰り道で見た、ゲンジボタルの乱舞で夢から覚めてしまった。

映画はとっくに終わっており、掃除のおばさんがもくもくとモップで床を拭いていた。

私はあわてるそぶりもなく、映画館を出て、タバコを一息吹き、安堵した。

そして、いつものバーに向かっていた。

バーに入り、いつものカウンターに座った。いつもの、ウィスキーハイボールをたのんで、またタバコに火を点けようとした時、カウンターの向こうから声がかかった。

「おい、聡じゃないか！」と。

私はびっくりした。

先程、映画館で夢の中で見た、同級生の友達だった。

私は、座っていた椅子から落ちそうになりながらも、そいつの名前を想いだそうとしていた。しかし、思い出せなかった。

顔かたちは先程の夢に出てきた同級生だ。そして、同級生であることもわかった。

そいつの家でよく遊んだことを想いだした。

家では、おかあさんがもくもくとミシンがけをしていた。

その時、いつもポータブルラジオから、音楽が聞こえて来た。

その同級生とプラモデルを作りながら、ミシンがけのガァガァガァという音の間から、ラジオの音楽が聞こえていたが、なんの音楽かは、特に注目もしなかった。

多分、外国の女性が歌っている歌の時もあったが、漫才みたいな掛け声が聞こえる時もあった。

そんなことをその同級生と話しながら、私は3杯目のウィスキーのオンザロックを注いでもらっていた。私は先程映画館の中で夢で見た、川の出来事を話したが、憶えていないと言う。

それから、話が進まなくなった。

その、同級生の名前も憶え出せないままでいた。

そうこうするうちに、終電の時間に近づいたことに気付いた同級生は、私がどうしていたか、どこに住んでいるのかさえも聞かずに、勘定を済ませ店を出ていった。

私は、もう一杯だけ、ウィスキーをくれないかとバーテンダーに頼み、

二口でのみ干し、過去と現在と夢と現実と映画のことを、冷静に判断しようとしたが、深く考えるのをやめ、その店を出た。



「ラジオデイズ」

テレビが普及するずっと以前の、ラジオが家族の団らんの中心であった頃のニューヨーク・クイーンズ区ロッカウェイ。少年ジョー（セス・グリーン）の一家は豊かではないが幸福な日々を送っていた。正体不明の父（マイケル・タッカー）、しっかり者の母（ジュリー・カヴナー）、母の姉夫婦とその一人娘、母の妹で男運の悪いビーおばさん（ダイアン・ウィースト）、母方の祖父母と大家族で、家の中には笑いがたえなかった。一方、華やかなラジオ界を夢見るサリー（ミア・ファロー）はナイトクラブでシガレット・ガールをしながらラジオのパーソナリティを目指して頑張っている。そんな努力のかいあっていよいよラジオ・ドラマで第一声という時に、日本軍が真珠湾攻撃を始めたという臨時ニュースが飛び込んできてせっかくのチャンスをフイにしそうになるが、幸運の女神に助けられラジオ・スターとして売れていく。第2次大戦はアメリカに本暗い影を落としているが、ジョーの生活にはほとんど関係なくラジオ・ドラマの主人公“覆面の騎士”がヒーローだった。そんな彼の驚いたこと、嬉しかったことは、父がタクシーの運転手だったこと、そしてラジオのクイズ番組に出たビーおばさんが見事に賞金を獲得してそのお金で欲しかった実験セットを買ってくれたことなどだった。家の近くの海岸にドイツの潜水艦が現われた。だが新年の豪華パーティでは一家の人々の幸福そうな笑いに充ちていた。

製作・脚本はウッディ・アレン。出演はミア・ファロー、ダイアン・キートンほか。

バーディ

次の日も、地下の映画館の前にいた。

受付のおばさんに声をかけてみようと思ったが、分厚いレンズの眼鏡をかけたおばさんは、愛想なく、今日の入館券をニコリともせずに出してきただけであった。

待合の長椅子に座って、今日の最終回の上映時間を待った。他に待ち客は2人ほどだった。火のついたタバコを柄の長いアルミの灰皿に押し付けようとする、前の回の上映が終わり、4,5人の客が扉から出てきた。

100人程しか入らない、その地下街の映画館の中は、赤いビロードが貼ってあるお決まりの椅子だった。大きな体をした大人には、すこし窮屈に感じた。

前の席とのスペースも狭い。スクリーンもそんなに大きくはなかったが、それでもここへ来ていたのは何故だろう。

もちろん、観たい映画が上映されていたのだが、当時はビデオなんかもあったが、家でゆっくりと観る習慣もなく、レンタルビデオ屋もほとんどなかった。

映画は映画館で観るものだと思っていた時代だし、リバイバル作品などは、ここでしか観れなかった。

そんな、閉館まじかな小さな映画館だったが、音響設備はいいんだぜと、オーディオマニアから聞いたことがある。なんでも、アメリカのアルテックというスピーカーで、昔はどこの映画館は大抵そのアルテック製のスピーカーらしかった。

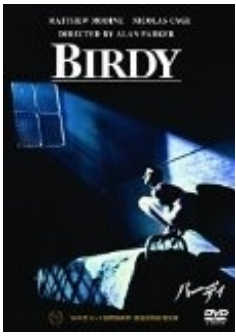
確かに、迫力のある音がしていたが、アクション映画やSFやハデなものには向いていただろうが、恋愛ものや地味で小難しい作品に必要なかどうかは分からなかった。

今日の映画は「バーディ」という映画で、青春時代に苦悶した時に観た印象が、未だに蘇ってくる。

『バーディ』（*Birdy*）は1984年製作の[アラン・パーカー](#)監督の作品だが、ベトナム戦争のショックで精神病院に入れられて、頑なに自らの幻想に心を閉ざしている青年バーディと、彼を立ち直らせようとする、同じくベトナム負傷兵の青年アルの心の交流を、鳥になることを夢見るバーディの幻想を交えて描いたヒューマン・ドラマだ。

映画の主人公と重ね合わせるといのは、よくあることだが、自分の青春時代もこの映画の主人公バーディと同じ心境にあったのかも知れない。

ストーリーは重いのだが、最後のシーンで鳥になったつもりの主人公が飛ぶシーンで救われたというか、解放された気分になったのは確かだ。



私は設計士になるべく、建築関係の学部がある大学を目指していた。

毎日、数式と格闘しながらの受験勉強は、かなりのストレスがあったに違いない。

しかし、夢や目標がありながら、そこへほんとうに到達できるのかという不安が、よりいっそう自分を孤独にさせた。

戦争で傷を負い心を病んでしまった人間と比べようがないのだが、確かにこの映画で救われたように思う。

そうして、一浪して大学に入り、設計の勉学に勤しんだが、この映画館だけは、通いつづけた。そうして、建築会社の設計士として、社会人になってからは、仕事の忙しさで、映画を観る時間も余裕も少なくなったが、この地下にある映画館の前を不思議と通っていたのだ

ウエストワールド

夢の中で誰かに追いかけられ、逃げ惑う夢を見たことが何度かある。

それは、この映画の影響かもしれない。

「ウエストワールド」

小学生の時に、父親に連れられ「シネラマOS」というところで、これを観た。

当時は、シネラマの意味が分からなかったが、映画のスクリーンが平べったくなく湾曲していたのを憶えている。

※「シネラマ」：湾曲した特製大スクリーンに、3本の35mmフィルムを横に並べて3台の映写機で同時に映写する方式。

その映画館の前に、映画の主人公のハリボテを見ただけで、怖い映画だなと幼な心にもわかった。



今日の地下街の映画館の日替わりの映画はその「ウエストワールド」だった。

なにかしら、館内はおろおろしい空気感を感じさせていた。

相変わらず、観客数は少ない。4、5人といった程度だ。

それでは、収益はあがらず、閉館に追い込まれるわなと思った。

しかし、多くの人々が、ここで、笑い、泣き、感動をしたのも確かだった。

一つの映画館が消えるということはどういうことなのかと、上映が始まる前に少し考えだした。

そうこうしていると、不意に眠気がして寝てしまった。

そして、夢を見た。

遊園地で、私の父と母が妹と楽しそうに、コーヒーカップやジェットコースターに乗って楽しんでいた。

お決まりのように、休憩所で、ソフトクリームをほおぼる妹の顔には、そのソフトクリームがつき、

それをハンカチでふいてやる母親の微笑ましい光景が浮かび上がって来た。

私はその時、少年野球をやっており試合があるので、ついて行かなかったのである。

悲劇は突然やってくる。

遊園地の帰りの高速道路で、父と母と妹が乗っ車が、大型トレーナーに追突され、まもなく3人とも亡くなった。

私は試合が終わり、友人の家で遊んでいた時に、その知らせを受けた。

急いで、自宅に帰ったが、親戚の人や近所のおばさん達、見知らぬ黒い服を着た人達が大勢いて、

私は何もすることがなく、ただ父に誕生日にもらった、江戸川乱歩シリーズの本を読んでいる真似をしながら、

家の状況を観察していた。

誰かに時折、「おなかはずいてないか？」と聞かれたが、あいまいな返事しかしなかった。

しばらくたって、父・母・妹がならばされている座敷に、祖母と一緒にすわらされた。

そして、見知らぬ黒い服を着た人達が、入れ替わりやってくるのは、私や祖母に話しかけたが、

私が立ち上がってしゃべろうとすると、祖母は私の足の脛をつねり、座っておとなしくしている
とばかりいう、

私は、延々と座り続けた。

しまいには、疲れて眠りこけた。

そこで、私は映画館が明るくなり上映が終わったことに気付いた。

今の夢は、本当のことであり、想像上の出来事ではなかった。

事実、私の父と母と妹は、交通事故でなくなっていた。

小学6年生になる前の春休みのことだった。

それから、私は祖母に引き取られ、中学・高校・までを祖母の家で過ごした。

そして、大学受験に失敗したことから、寮のある予備校で一年を過ごし、大学生活を送ること
になった。

それから、社会人になるまで、遊園地やテーマパークといった所には、行ったことがなかった。

「ウエストワールド」のテーマパークのように、機械やコンピューター制御が壊れ、楽しいはず
の場所が一瞬にして、

修羅場とかすことを想像してしまうのだった。

やりきれない気持ちのまま、地下街の映画館を出て、

いつものようにバーに向かった。

いつものウイスキーハイボールとオンザ・ロックを飲み、その店を出た。

その日の夜はなぜか、いつもの星がいつもより輝いているように見えた。

お葬式

私は何度も「お葬式」と遭遇している。

身近な親兄弟や親戚の人、仕事関係の人など。

今まで、何回「お葬式」に出席しているのだろう。

映画「お葬式」は二度目だった。

公開当初と、ここ地下街の映画館のリバイバル。

今日は、私が退職するまで後2日だった。

いつものように、地下街の映画館にいた。

映画「お葬式」は、1984年公開の伊丹十三の初監督作品。

これまで厳粛な儀式であったお葬式を初めて取り上げた作品である。初めて出すお葬式に右往左往する家族と、周囲の人びとの姿をコミカルに描いた。



この映画はいつも笑ってしまう。

人間って、厳粛な儀式の時に限って、緊張して失敗をしたり、トンデモナイへまをしたりする。

客観的に、人が真剣にやってる時のハプニングは面白い。

失礼ながらも、滑稽であり笑えてしまう。

この映画はそこらをユーモアにしているところがいい。

その日は、映画館にカップ酒を持ち込んだ。

実際のお葬式やお通夜の席では、食事が出され、お酒も振る舞われる。

普段、お酒を飲まれない方にも差し出される。

時には、飲み過ぎて宴会場のようになることがある。

故人を偲ぶと言う名目だが、そうして楽しく飲んで偲んであげた方が、

しみりするよりいいのではないかと、

個人的には思う。

カップ酒のせいで、また眠気が誘って来た。

そして、ぼんやりと夢ごちになった。

私は、社会人になってよく酒を飲んだ。同僚とも上司とも、得意先の相手とも、そうやって飲める口だから、いつも宴

会のお誘いがかかるが、最後は一人バーに行き、一人しみり飲むのも好きだった。

今日も、仕事の成功から、お祝いと称して仲間内と何軒かはしご酒になった。

居酒屋に始まり、スナックやラウンジみたいなところに行った。

しかし、何故か私一人になり、いつものバーにいた。私はかなり酩酊していた。

「もう、一杯」と言ったところで、バーテンダーに制止され、冷静なバーテンダーに諭されて、

その店を出た。

私は、酔いがまわっていたので、タクシーを止め乗り込んだ。

かなりの長距離になるが、今日は仕事のご褒美でもらった、タクシーチケットがあるから大丈夫だと思いう気持ちが、

酔いととも手伝って大きくなっていた。

高速を乗り、いくつかの道を過ぎていくうちに、酒の酔いもだんだんと醒めてきた。

住宅団地を通り過ぎ、小さな林道をゆっくりとタクシーは進んでいく、その前方にぼんやりと、提灯のあかりがついて

いる平屋の家の前で、タクシーは止まった。

「お客さん、ここですね。」

と運転手が言ったので、タクシーチケットを渡し、車を降りた。

自分の家であるようであるが、どこか違う。

それよりも、懐かしさを感じた。

門の両脇に淡い灯りの提灯がぶら下がっているところを過ぎ、

ガラガラという引き戸を引いた。

かつて、子供の頃、両親と住んでいた家だ。

しかし、人の気配が感じられない。

玄関の灯りはついているのだが・・・

少し段がある土間から、ゆっくりと客間を通り、奥の部屋の障子戸を開けると、

なんと、死んだはずの父と母と妹が喪服を着て、座っているのではないか。

「お帰りなさい」

と母がいった。

しかし、答えようがなかった。

そして、恐る恐るその祭壇に飾られてある。遺影を見ようとして・・・

肩を叩かれてる感触がした。

「お客さん、もう帰りましょ。今日はだいぶ飲まれましたよ。」

とバーのバテンダーが言って起こされた。

私は、あのバーにまだいたのだ。

私は道路に出て、タクシーを止め、乗り込もうとしたが、

「悪いが、電車で帰るわ。」

と言って、タクシーが走り去るのを見送った。

それから、私は、まだ人がまばらな、地下鉄の始発で、家に還るのであった。

ニュー・シネマ・パラダイス

映画ファンなら、必ずこの映画の名をあげるだろう。

「ニュー・シネマ・パラダイス」

ローマ在住の映画監督・サルヴァトーレのもとにある晩、故郷の母から電話が来て、アルフレードが死んだことを告げる。サルヴァトーレはベッドで寝ながら、昔のことを思い出す。

第二次大戦中、「トト」と呼ばれていた幼いサルヴァトーレ少年の父は戦争に取られ、彼はシチリア島の僻地の村で、母と妹と暮らしている。当時、村のたった一つの娯楽施設は村の中心の広場にある、教会を兼用した小さな映画館だった。

中年男性が映画に魅せられた少年時代と青年時代の恋愛を回想する物語。感傷と郷愁、映画への愛情が描かれた作品である。



この映画同様、地下街の小さな映画館も明日で閉館となる。

映画館として建てられたところではないので、新しいオフィスビルが建つのか、地下街そのものがリニューアルされて、ショッピングモールになるのかは定かではない。

いずれにせよ、この映画館は無くなるのだ。

そして、私の仕事も最後となり、定年を迎える。

この場所には、再び来ないだろうし、来る必要もなくなる。

この映画館で観た映画の、笑い・泣き・驚き・怒り・喜びの感動も思い出とかすのだ。

いや、映画とはもともと心のスクリーンに焼き付けるものだ。

人生もまた同じこと。

人生は2,3時間では終わらないが、映画は自分が体験したことや、実現しなかったことを、やりたかったことを、スクリーンの中で表現してくれるのだ。

だから、いつまでも映画は私達を魅了させてくれるのだ。

最近、映画館は「シネマコンプレックス」と呼ばれ、商業施設の中に、いくつものスクリーンがあり、複数の映画が上映され、映画館内の設備も充実し、映画を観る椅子も豪華でゆったりと観れる。音響効果にも優れていて、娯楽施設としては十分である。

しかし、映画自体はどうだろうか？

ワクワクドキドキした感動は今もあるだろうが、映画と映画館にどれだけ思い入れがあるのだろうか？

「ニュー・シネマ・パラダイス」は、最後まで寝ずにしっかりと心のスクリーンに焼き付けた。

そして、映画をなぜ映画館でわざわざ観るかということだ。

今では、家庭の映像設備・音響設備も豪華である。レンタルのDVDや衛星放送・インターネットで、気軽にみることが出来る。

映画館は一人で行くし、誰かとも行く。

一人で行くのは誰かに干渉されたくないからだが、この場所で同じ映画を観て、感情を共有したいからかも知れない。リバイバル作品は余計に、同好の士、同志がいる気分で観ていたのである。

同じ時にでなくとも、同じ映画を観たというだけで、あれやこれやとその映画の批評をし、語り、コミュニケーションできるのである。

映画は古今東西、人々の心を魅了してきたのである。

昔、TVで映画を紹介した後、

「いやあ～やっぱり、本当に映画っていいですねえ。」

という映画評論家がいたが、

本当に「映画」っていいもんだなと思う。

私は、今日定年になり、会社を退社した。

手には、お祝いのバラの花束をもらった。

持って帰るには少々恥ずかしかったが、いい案が思いついた。

そして、地下街の映画館の前にいた。

ここも、閉館になるんだなと考え深げになった。

今日も、ここで「映画」を観ていこうかと思ったが、

映画館のもぎりのおばちゃんに、



エンドロール

最後にこの思い出話を作るきっかけとなった、

[「まぼろし映画館」](http://maboroshi.movie.coocan.jp/)

<http://maboroshi.movie.coocan.jp/>

というHPで、思い出の映画館の数々を残して下さった、

山本英行様に感謝申し上げます。

モチーフとなった、

「大毎地下劇場」

だけでなく、

「三越（北浜）劇場」や「毎日文化ホール」、「阪急プラザ」、シネラマの「OS劇場」、
幼少時代の「高槻第一劇場」、学生時代の京都の「京一会館」等

貴重な写真の数々。

ここに、重ねて敬意と感謝を申し上げます。

また、ブログやなんかで数えきれない、

「映画」や「映画館」の思い出を紹介していきたいと思います。

Bonne Projection!

「Bonne Projection!!」

「Bonne Projection!!」

(フランス語で「よい上映を!」 という意味)

シネマテーク：1935年（昭和10年）にアンリ・ラングロワとジョルジュ・フランジュが、フランスの首都パリで、旧作フィルムを上映するためのシネクラブ「セルクル・デュ・シネマ」を結成し、翌1936年（昭和11年）に発展的に組織した「シネマテーク・フランセーズ」をはじめりとする。

思い出のシネマテーク

<http://p.booklog.jp/book/109921>

著者：jazz me blues

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/humanforest/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109921>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109921>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ